

南方（ニューギニア）

「傘寿残照」

——たどり来し道——

和歌山県 脇村 英一

昭和十一年（一九三六）年、旧国鉄に就職した。

昭和十一年三月三十日、兄妹中で一番頭の良かった妹寿美子が急性肺炎で亡くなった。大阪へ遊びに連れて行く約束が果たせず、いまだに心のこりである。大阪湊町車掌区で車掌になり、和歌山車掌区を経て、昭和十七年四月一日、和歌山六十一歩兵連隊に現役兵として入営した。

昭和十九年四月二十九日天長節の夜明けに門司港を

出帆、ニューギニア・マノクワリを目指した。当時もっとも危険といわれていたバシー海峡を無事に突破して、フィリピン・マニラ港に上陸した。北斗七星と南十字星を同時に見られる夜空、ヤシの並木などの風景は、とても戦時中とは思えない。

船団再編成のため、一週間兵站宿舎で過ごして、マニラ港を出帆した翌朝、スルー海セブ島沖で魚雷の直撃を受けたが、幸いに船首と一番ハッチの間を約二メートルの穴をあけて海中で爆発したので、沈没を免れた。五月二十四日、ようやくハルマヘラ島ヤホールに辿り着いた。

戦況が悪いので、目的地ニューギニア・マノクワリにはとても行けず、昭和十九年七月三十日にムナ島市

庁要員としてハルマヘラ島グルワを出帆しました。

昭和十九年八月一日、途中無事にセレベス島ビートン港に上陸、兵站宿舎で約半月揚塔作業に従事して、八月十七日再びビートン港を出帆、南下し、二十六日無事マカッサル港に上陸、陸路を北上してパレパレ東部の山地に自動車の補給及び修理工場を開設して作業した。

昭和二十年八月二十五日、作戦任務を解除され、十一月十九日、マリンプン地区に集結を命ぜられ、約七か月、昭和二十一年六月まで抑留生活に入ったのである。

マリンプン収容所は南セレベスのマリンプン草原にあり「死の草原」といわれ、第一次大戦中にジャワ移民やドイツ軍捕虜が、ほとんど死に絶えたといういわく付きの「地の果て」なのである。

私たちは、まず宿舎の建設、井戸掘り、ジャングルの伐採、開墾、堆肥づくりと分担して作業に励んだ。穴を掘って、堆肥を敷きつめて水漏れを防ぎ、大根、

キュウリ、ナス、カボチャなどを栽培した。捕虜の労働は、農耕作業の他道路、橋の修復であった。

シベリアへ抑留された捕虜たちの重労働に比べると、南方諸地方の捕虜たちは、自給自足のための開墾、開発という名目のため、精神的にも肉体的にも負担が軽いはずである。南セレベス・マリンプンに収容された軍人、軍属、一般邦人は、約二万人であったが、ほとんど茅しか成育しない草原にほうりこまれて、途方にくれた。他の抑留生活と比べようもないので、集団餓死においやられたように感じたものだ。

西部ニューギニアから栄養失調のため、移送されてきた一群が「死の草原」の農耕に立ち向かった時「ここでトドメをさされるのか」と思ったらしい。事実また、彼らはバタバタと倒れていった。

井戸水によるかんがいと堆肥の効果で、天候にも恵まれて、たちまち豊富な野菜が成育し収穫された。

野菜が豊富になった一方では、激しい労働のため体は肉類を要求するので、我れ勝ちにネズミ、犬、猫を食、べはじめた。また世間でよく聞く言葉にビタミンB

やC不足と言われたが、やはり体が要求した。たとえばビタミンCが不足すると緑色を見るだけである程度満足した。

抑留生活もやがて五月末になると全員内地送還が決まり、パレパレのトランジットキャンプに移動を命じられた。六月五日の朝、私たちはインド兵の運転するトラックに乗って収容所の門を出た。乗船地パレパレまで二時間で到着した。

六月九日、出帆の復員船リパティ号は第六梯団で、南セレベスの日本人はすべて引揚げを完了する。私たちのような兵器引き渡しと残務整理者がほとんどで、受刑者も同乗したことは痛ましかった。

午後五時、抜錨、出港の汽笛が鳴った。なぜか、船内は静まりかえった。万歳の声も、軍歌の合唱もない。戦時中の船出とは違う。みんなでじっと汽笛に耳を傾け、ゆるやかに回転し始めた船体をデッキにもたれて眺めながら、万感の思いにたえているようだ。陸岸は動き、静かに遠ざかる。「さよなら、さよなら

……」心で叫ぶが声にはならなかった。私は生涯最大の喜びを、じっと一人かみしめていた。

静かなパレパレ港を出帆して一路帰国の船旅と違い、戦いに敗れたつかれた心をいだいているとはいえない。安らかな船旅である。だがやはり祖国はどうなっているのか、我が家は、家族はと、違った不安はつきない。約一週間の航海で船は無事、潮岬南方に到着したが、それから田辺港に入港するか、名古屋港に入港するかと無線で打合せをしていた。

二十日になってようやく田辺文里港入港が決まった。なんと幸運なことだ。生きて日本に帰れるだけでなく生まれ故郷の田辺文里港につくということは、まるで我が家の庭先に着くようなものだ。私は喜びと安堵に胸が大きくふくらんだ。

船は紀伊水道を一気に北上した。やがていつも夢にまで見た故郷田辺湾の入口、白浜番所の鼻を右に見ながら入港した。前方に見える街並みは田辺で、後ろの山は「左から龍神・鷺尾・楨山で安珍、清姫、道城寺ことの起こりの真砂庄あの山裾にございます」と、明

光バス観光案内の名調子が思わず口に出た。つづいて豚木の「ふるさと」の山に向かって言うことなし。ふるさとの山はありがたきかな」が実感としてよみがえった。私は田辺生まれだからそう思ったが、戦友たちは扇ヶ浜の白砂青松に日本の景色と心うたれて、いつまでも飽きずに見つめていたのが印象的だった。まさに日本の風光であり、田辺のシンボルである。

田辺引揚援護局は、昭和二十一年二月二十四日より六月二十三日までの実質四カ月間のあわただしい引揚げ業務が実施され、十月一日に実質業務が停止され、廃局になった。

その後、十二月二十一日に南海大震災があり、津波により美しかった文里の風景も家々も、一瞬にして倒壊流失したので当時を偲ばせるものは小高い丘だけである。

昭和六十一年十月、紀南文化財研究会が中心になって、海外引揚四十周年記念式典を盛大に行い、記念碑の建立・記念誌の発刊で、資料の収集などもようやく緒についた。

また、NHKテレビが「しられざる引揚港田辺」を作成し、近畿と全国に二回放送されたこと、また終戦五十年を記念して、平成七（一九九五）年に「引揚港田辺資料室」を開設、平成八年には「引揚港田辺・海外引揚五十年記念誌」を発刊している。

懐かしいインドネシア語

テレマカシ・バニヤ || 大変ありがとう

マカン || 食べる・食べ物

イカン || 魚

バグス || 良い・よろしい

サマサマ || 同右

キラキラ || 大方・大体

ジャランジャラン || 散歩する

ブランブラン || 帰る

ラッカスラッカス || 早く早く

トアン || 旦那

ナシ || 飯

ルマー || 家

サヤ 〓私
 アピー 〓火
 アオ 〓竹
 インドネシア語は、容易に日本人には意味が通じるので覚えやすく、重ねて言う言葉が多かった。

私が田辺文里港に生還できた理由

- 一、運が強かった。
- 二、昭和十六年、マッカーサーは「アイ・シャル・リターン（私は必ず帰ってくる）」という名文句を残してコレヒドール島を脱出した。それから四年後、昭和二十年八月三十日午後、神奈川県厚木飛行場に着陸した軍用機、バターン号から姿を表わし、タラップに立ち「メルボルンから東京への道程は長かった」と語った。日本占領を急いだマッカーサーはニューギニア・フィリピン・沖繩と蛙飛び作戦をとったため、セレベス・ボルネオ・台湾等の上陸せず、空襲のみであったから戦禍が案外少なかった。
- 三、昭和二十年八月十七日、インドネシアが独立宣言

をした。宗主国オランダ・イギリスとの間で独立戦争が起こった。日本の軍人・軍属・一般邦人は海外に約六百三十万人おりましたが引揚げの輸送船がないので困っていました。また、オランダやイギリスは、日本人が独立戦争に参加するのを恐れて、アメリカに一年以内に引揚げできるように輸送船リパティ号を百隻貸与するよう要請して貸してくれたので、一年かからずに引揚げが完了しました。引揚船はアメリカの船ですが運航は日本人がしたので、引揚者は安心でした。

和歌山県下軍人・軍属の田辺文里港上陸人

数合計一万八十二人

和歌山市	二四九	有田郡	七五
田辺市	一〇〇	日高郡	一〇八
海南市	四〇	伊都郡	六三
橋本市	三六	那賀郡	一一四
御坊市	二七	海草郡	三七
有田市	二七	西牟婁郡	九六

第五回手づくり紙芝居コンクールに応募

平成十年七月五日、和歌山県立図書館主催「手づくり紙芝居制作講習会」がありました。かねてから、子供たちに戦争を語りつぐのに面授が大切だと思っていました。面授というのは、人間と人間が向き合い、お互いに息づかいのきこえるような距離でもってなにかを学び、なにかを伝え、そしてなにかが伝えられる。ということをいいます。これは、紙芝居がピッタリだと思いました。面授では、言葉の内容と同時に、その言葉を発する人間の表情とか肉声、あるいは息づかい、間のとりかた、ということ全部を通じて、なにかが人間に伝わってくるものではないでしょうか。

紙芝居は、日本が生み出した世界に誇る文化財です。昭和五年頃、街頭紙芝居という形で誕生したこの独特な文化は現在、主に「出版によるもの」と「手づくりによるもの」によって更に多くの人々の心をとらえ、海外に向かって羽ばたき始めています。特に手

づくり紙芝居は、紙芝居の原点を深めるものとして期待されています。

では、紙芝居の特性は何か、紙芝居に似たものに絵本があります。絵本は自分が作家の中に入っていく「個」の世界であるのに対して、紙芝居は絵本と逆で現実に出て「共感」を得る、感性を育むものです。

二十世紀は「個」、二十一世紀は「共感」の世紀といわれています。紙芝居は、昭和不況の時代、駄菓子屋が紙芝居に明日を期待した。昭和一桁の中味ある、心の素敵なものではじまったが、絵本より紙芝居が見られてきたのは、街頭紙芝居の故である。

私は共感を得るため紙芝居をいたします。

手づくり紙芝居（あらすじ）

第一作 引揚港田辺ものがたり

太平洋戦争終結時、海外には約三百三十万人の軍人・軍属と三百万人以上の一般邦人が在住していたが、政府の引揚げ業務の体制が整うとともに、これら大勢の人々の引揚げが始まった。

全国で指定された十八引揚港のうち、近畿では舞鶴と田辺の二港が指定された。田辺は戦時中海兵団がおかれており、戦災も僅かであったため、引揚げ業務を遂行するうえで適地とされたようである。

田辺港は、昭和二十一年六月二十四日までに、主として中国・台湾・マレーシア・インドネシア・バプアニューギニアなどから二十二万三千三十二人の引揚者を迎え、同時に戦争犠牲者一万一千四百六十九柱の遺骨も無言の上陸をした。

引揚者の一人にニューギニアから帰ってきた根本和彦さんがおりました。根本さんは当時のことをこう語っておられます。「今も日に浮かぶのは岩礁に生えた一本の松と赤い唇の娘さんが小船で迎えてくれたこと」と思いだしておられました。四十年記念誌の中で書かれています。このように引揚げの秘話は数々残されています。今まさに終戦後半世紀が過ぎ、引揚げ当時のことは、風化されつつありますが、文里港の歴史、引揚げについて、記念誌の発刊や引揚記念碑を建立していつまでもその歴史を後世に伝えます。

第二作 おばあさんがひとり

新婚間もなく召集された主人がシベリアで亡くなった未亡人物語です。おばあさんが毎日毎日おじいさんの帰りを待っていました。

タンポポの花やホタル、ジョウビタキがおじいさんを探してくれると約束してくれました。明るる年の秋になってジョウビタキが帰ってきたのです。そしておじいさんは見つかったのです。遠いシベリアの雪の原っぱで眠っていたのです。

おばあさんは次の日からもうおじいさんの帰りを待たなくなりました。今では胸の中のおじいさんと二人で住んでいます。

第三作 引揚港の子どもたち

終戦後、田辺の文里港は、引揚港として活躍しました。昭和二十一年の四カ月間で約二十二万人の方が、引き揚げてこられました。

引揚者の中には、いろいろなエピソードが残っています。この話は、当時、文里港へ引き揚げてきた方

で、地元の子どもの励ましによって、生きて行く気持ちをとるもどし、そのお礼の気持ちとして、昭和二十八年ころから、児童図書を贈り続けた田中源助さんと、図書館をはじめとする地元の方々の交流を描いたものです。匿名での寄贈をずっと続けて、子どもたちの読書意欲の向上に、大きく貢献したのです。

地元では、どうにかしてこの贈り主を探そうと苦慮した結果、思いもよらないところから贈り主を調べあげたのも大きくとりあげられ、子どもたちは、お礼の感謝文を書いて手渡しました。戦後のさわやかエピソードです。

終わりに、昨年八月民放の討論会「責任・無責任」があり、青年二十人・壮年二十人・高年二十人が参加して行われました。それに参加して感じたことを述べます。

「若者よ！ 明るい夢を持つよう」

「日本の国公債残高六百六十六兆円にもなる。若者たちは莫大な債務を背負わされたうえ、支払っただけ

の金額の年金さえ受け取れない大損世代だ。そんな日本にした親たちの世代を恨む」とまで言っている。

しかし、親たちの世代が千三百三十兆円の金融資産と三千兆円以上の不動産や基盤施設を残してくれていることには、ほとんど関心を示していない。親たちが、高齢者年金の中から年々巨額の貯蓄をしていることも、本人を含む子供たちに高い教育を受けさせたことも考えていない。将来の志や未来の夢が語られることのまったくない。ただただ不安と不満の羅列で終わってしまう。これが今日の若者の平均だとすれば、あまりにも悲しい。

若者たちに望まれることは、不安と不満を繰り返すのではなく、未来に対する夢と志しを抱くことである。

生まれたばかりの明治維新政府がクラーク博士を招いたのも、人口の受け皿として北海道を開拓するためだった。博士は将来の貧困と飢饉に怯える日本の若者に「大志を抱け」と叫んだ。今もまた、人口減少と超過疎化に怯える若者に対して「明るい夢を持つ」と言

いたい。

〔編注〕

脇村英一氏の戦争体験については、第VI巻にも掲載されております。